

センター試験後継テスト 実施方針案公表

河合塾

2017/5/17

このほど文部科学省より「高大接続改革の進捗状況について」が発表された。このうち大学入学者選抜改革については、センター試験の後継となる新テストの実施方針案、このテストの実施に合わせた個々の大学における入学者選抜のルール見直しに係る予告案の2点が公表された。以下、大学入学者選抜改革について今回判明した内容を詳しくみていく。

■共通テスト 出題教科・科目はセンター試験と変わらず

センター試験に代わり 2020 年度（2021 年 1 月実施）から実施される新テストはこれまで「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」と呼ばれてきたが、名称を「大学入学共通テスト（仮称）」（以下、共通テスト）とする方向で検討されている。今回、この共通テストの実施方針（案）が明らかになった。文部科学省は、今後、大学・高等学校等の関係団体の意見を聞き、すみやかに実施方針を確定するとしている。

案の段階ではあるが、公表された実施方針を確認していく。今回、はじめて出題教科・科目が明らかになった【図表 1】。共通テストのスタート当初は、現行のセンター試験と同じ教科・科目で実施される。ただし、国語、数学では一部に記述式問題が出題される。実施期日は現行のセンター試験と同じ 1 月中旬の 2 日間とされ、記述式問題もマークシート問題と同一日程で、それぞれの教科の試験時間内に実施される。

【図表 1】大学入学共通テスト出題教科・科目

教科	出題科目	出題範囲	備考
国語	「国語」	「国語総合」の全ての内容を出題範囲	記述式問題(古文、漢文を除く)を含む
地理 歴史	「世界史A」「世界史B」 「日本史A」「日本史B」 「地理A」「地理B」		
公民	「現代社会」「倫理」 「政治・経済」 「倫理,政治・経済」	「倫理,政治・経済」は、「倫理」と「政治・経済」を総合した出題範囲	
数学	「数学 I」「数学 I・数学 A」 「数学 II」「数学 II・数学 B」	「数学 A」については「場合の数と確率」「整数の性質」「図形の性質」のうち 2 項目以上の学習者に対応した出題（問題を選択解答させる）、「数学 B」については「数列」「ベクトル」「確率分布と統計的な推測」のうち 2 項目以上の学習者に対応した出題（問題を選択解答させる）	「数学 I」「数学 I・数学 A」は記述式問題を含む、記述式問題の出題範囲は「数学 I」とする
理科	「物理基礎」「化学基礎」 「生物基礎」「地学基礎」 「物理」「化学」 「生物」「地学」		
外国語	「英語」「ドイツ語」 「フランス語」 「中国語」「韓国語」	「英語」は「コミュニケーション英語 I」「コミュニケーション英語 II」及び「英語表現 I」を出題範囲	「英語」はリスニングを含む

※上表のほか専門学科に関する科目として「簿記・会計」「情報関係基礎」が出題される

※文部科学省「高大接続改革の進捗状況について」（2017 年 5 月 16 日）より

マークシート式問題は継続するが、複数のテキストや資料を提示し、必要な情報を組み合わせ思考・判断させる、正解が一つに限られない問題とするなど、思考力・判断力・表現力を一層重視した作問へ見直すとしている。

なお、次期学習指導要領に対応する 2024 年度（2025 年 1 月実施）の共通テストからは、教科・科目の簡素化を図ることが検討されている。

■国語・数学で記述式問題を導入、採点はセンターで実施

共通テストの記述式問題は、大学入試センターが作問、出題し、採点は民間事業者に委託される。採点結果はマークシート式問題の成績とともに大学に提供される。

国語の出題範囲は「国語総合（古文・漢文を除く）」で、多様な文章や図表などをもとに複数の情報を統合し考えをまとめたり、その過程や結果について論述したりする思考力・判断力・表現力を評価するとしている。文字数 80～120 字程度の問題を含む 3 問程度が出題される。また、マークシート式問題と記述式問題の大問は分けて出題される方向だ。試験時間は現行のセンター試験より 20 分長い 100 分程度としている。

数学は「数学 I」「数学 I・数学 A」で記述式問題を出題し、出題範囲は「数学 I」となる。図表やグラフなどを用いて考えたことを数式などで表したり、問題解決の方略などを正しく書き表したりする力などを評価する。問題数は 3 問程度で、こちらは国語と異なり、大問の中にマークシート式問題と記述式問題を混在して出題する。試験時間は現行のセンター試験より 10 分長い 70 分程度としている。

【図表 2】共通テスト 記述式問題の概要

	国語	数学
出題科目	「国語」	「数学 I」「数学 I・数学 A」
出題範囲	「国語総合」（古文・漢文を除く）	「数学 I」
出題数	●文字数 80～120 字程度の問題 3 問程度 ●マークシート式問題と記述式問題の大問は分けて出題	●問題数 3 問程度 ●大問の中にマークシート式問題と記述式問題を混在して出題
試験時間	マークシート式とあわせて 100 分程度	マークシート式とあわせて 70 分程度
評価すべき能力・問題類型等	●多様な文章や図表などをもとに、複数の情報を統合し構造化して考えをまとめたり、その過程や結果について、相手が正確に理解できるよう根拠に基づいて論述したりする思考力・判断力・表現力を評価。 ●設問において一定の条件を設定し、それを踏まえ結論や結論に至るプロセス等を解答させる条件付記述式。特に「論理（情報と情報の関係性）の吟味・構築」や「情報を編集して文章にまとめること」に関わる能力の評価を重視。	●図表やグラフなどを用いて考えたことを数式などで表したり、問題解決の方略などを正しく書き表したりする力などを評価。 ●特に「数学を活用した問題解決に向けて構想・見通しを立てること」に関わる能力の評価を重視。

※文部科学省「高大接続改革の進捗状況について」（2017 年 5 月 16 日）より

大学入試センター HP には、これら記述式問題のモデル問題例が公表されている。

なお、次期学習指導要領に対応する 2024 年度（2025 年 1 月実施）の共通テストからは、地理歴史・公民、理科学分野等でも記述式問題を導入する方向で検討するとしている。

■英語は 4 技能評価導入へ、民間の資格・検定試験活用

記述式問題の導入とともに注目されるのが、英語 4 技能（読む・聞く・話す・書く）の評価を共通テストで導入し、民間の資格・検定試験を活用する点である。英語 4 技能については、現行の高等学校学習指導要領でも総合的に育成することが求められており、大学入学者選抜においても 4 技能の総合的な能力を評価できるようにすることが適切であるとしている。しかし、50 万人以上が同日に一斉に受験する共通テストで「話す・書く」能力を測ることは、現実的には困難である。このため、民間の資格・検定試験を活用しようというものだ。

具体的には大学入試センターが認定した民間の資格・検定試験（認定試験）を高校 3 年生以降の 4～12 月に受験する。受験可能回数は 2 回までとされている。成績提供の流れは次のようになる。受験者は、認定試験の出願時に自らの成績を大学入試センターに送付することを依頼、実施団体は受験者の成績を大学入試センターに送付する。大学入試センターは認定試験の結果を一元的に集約し、大学からの請求に基づき、共通テストの成績とともに認定試験の成績を大学に提供する。

認定試験の実施団体には、センター試験と同等以上の実施場所の確保、毎年 4～12 月の間に全都道府県で複数回の試験実施、検定料については低所得者世帯の受験者等への割引、複数回受験時の減免といった配慮などを求めるとしている。

共通テスト「英語」の取扱いについては、現時点では流動的だ。「共通テストの『英語』は実施しない」「2023 年度（2024 年 1 月実施）までは、共通テスト『英語』を引き続き実施する」の 2 案が検討されている。後者の場合、大学が共通テストと認定試験のいずれか、または双方を選択することとなっており、受験生がいずれかの利用方法を選択することは想定されていない。

いずれにしろ将来的には共通テストでの「英語」試験は廃止の方向となっている。また、認定試験の有効期限、既卒者の対応も今後の検討事項となっている。

■個別試験のルールも見直し 「学力不問」入試の改善はかる

大学個別試験のルールについても見直し案が示された。各大学の入学者選抜は、文部科学省から出される「大学入学者選抜実施要項」に従い実施される。実施要項はいわば大学入試のルールブックともいえるものだ。今回、共通テストが実施される2021年度入試から新たなルールを設定するとし、その予告案が公表された。今後、大学・高等学校等の関係団体等の意見を聞き、各大学に通知する予定としている。

見直し案では、「一般入試」「AO入試」「推薦入試」の在り方を見直し、高大接続システム改革の趣旨を踏まえた新たなルールを構築するとしている。具体的には、多面的・総合的な評価の観点からの改善を図りつつ、各々の入学者選抜の特性をより明確にするため、入試区分を【図表3】のように変更する。

また、入試の実施時期についても新たな基準を設けるとしている。現在のAO入試である総合型選抜は、出願時期を現行の8月以降から9月以降に変更する。また、現行でははっきりとした基準がない合格発表時期も11月以降と明記される。現在の推薦入試である学校推薦型選抜は、出願時期は現行と同じ11月以降だが、合格発表時期は12月以降となる。両選抜とも合格発表日は多くの大学で現在より後ろ倒しとなる見込みだ。現在の一般入試にあたる一般選抜を中心に実施されている学科試験の実施時期についても、1月25日～3月25日とされた。現行の2月1日～4月15日から若干前倒しとなり、共通テスト直後から学科試験を課す選抜の実施が認められる。

現状のAO・推薦入試では、本来の趣旨目的に沿った丁寧な選抜が行われていない、早期に合格が決定されることによる高等学校教育への悪影響が見られる、大学教育への円滑な接続につながっていないなどの問題が一部で指摘されており、それに対する改善案を提示した形だ。

【図表3】大学入学者選抜実施要項の見直し案

		8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月
AO入試	現状	出願 (8/1以降)	発表 (10/1以降)							
	改善案		出願 (9/1以降)	発表 (11/1以降)						
推薦入試	現状				出願 (11/1以降)	発表 (12/1以降)				
	改善案				出願 (11/1以降)	発表 (12/1以降)				
一般入試	現状						試験 (2/1～4/15以降)	発表 (～4/25)		
	改善案						試験 (1/25～3/25)	発表 (～3/25)		

■入試区分の変更

■入試の実施スケジュールの変更

＜変更前＞ ＜変更後＞

一般入試 → 一般選抜

AO入試 → 総合型選抜

推薦入試 → 学校推薦型選抜

※新名称はいずれも仮称

※文部科学省「高大接続改革の進捗状況について」(2017年5月16日)より (注) AO入試、推薦入試でも教科・科目に係るテストを課す場合は同様

入試の内容についてもそれぞれ改善点が示された。

一般選抜では、①筆記試験に加え調査書や志願者本人が記載する資料等の積極的な活用、②共通テストの積極的な活用とともに、個別入試でも記述式問題の導入・充実等に向けて取り組む、③英語4技能を評価するために民間の資格・検定試験を活用することの3点が挙げられている。個別入試でも共通テストの改善と足並みを揃えることを求める格好だ。

学校推薦型選抜、総合型選抜では、現在の実施要項に記載されている推薦入試の「原則として学力検査を免除」、AO入試の「知識・技能の修得状況に過度に重点を置いた選抜基準としない」をそれぞれ削除、各大学が実施する評価方法等または共通テストのうち少なくとも1つの活用を必須化するとしている。評価方法の具体例としては、小論文、プレゼンテーション、口頭試問、実技、各教科・科目に係るテスト、資格・検定試験の成績等が示されている。また、一般選抜で示された3つの改善策は学校推薦型選抜、総合型選抜においても推奨するとしており、学力を重視した内容への転換をはかる。

■調査書など提出書類の見直しも対象に

もう一つの改善案として示されているのが、調査書をはじめとした提出書類の見直しである。

調査書については記載内容の見直しをはかる。現行の調査書の「指導上参考となる諸事項」の欄を拡充し、記載欄を「各教科・科目及び総合的な学習の時間の学習における特徴等」「部活動、ボランティア活動、留学・海外経験等」などの6項目に分割、より具体的な内容が記載できるようにする。また、現在の「評定平均値」の呼称は「学習成績の状況」に改める。本来、「評定」は高等学校学習指導要領に示す各教科・科目の目標に基づき、その実現状況を総括的に評価するものであるが、「評定平均値」は「評定」を量的に単純平均したもので、目標に準拠した評価とは性格が異なるためとしている。

このほか、推薦書の見直し、志願者本人の記載する資料等に関する内容を実施要項に盛り込むことなどが挙げられている。多面的・総合的な評価につなげるため、提出書類全般の充実をはかる内容となっている。